

# 寝屋川市を舞台にした

## 小説がヒット!

ホラー作家 最東対地さん(40歳・御幸東町)



「共稼ぎの妻に頭を下げたのは7年前のことでした。当時、趣味でネット小説を書いています。出版社や飲食店など職を転々。それでも妻は「ゼいたくさえないから生活できるから」と背中を押し

「ネットを受けても文壇で受けるわけがないと思っていたので、賞を取れるとは」と本人が一番びっくり。しかし、選考委員の宮部みゆきさんが「魅力的でホラー的破壊力に満ちている」と評した出世作は増刷を重ね、約6万部に達しました。

### 「ご当地ホラー」で新ジャンル

デビュー後、毎年1作品を出版し、7月に出版されたばかりの「寝屋川アビゲイル」は6作目。大阪を舞台にした「ナニワ・ホラー」のような新感覚のジャンルはできないかと企画した作品です。

「ホラーって何か不吉なことが起きる話。そこに住んでいる人が嫌な思いをすることだけは避けたくて、軽いタッチのキャラクターものにしました。」

### ヒューマンドラマにも挑戦

タイトルも先に決めました。タコ公園や途中に立っていたはちかづき姫の像のほか、寝屋川市駅周辺の商店街も登場。「表紙は『ねやがわいちばんがい』のイラストなんです。ホラーの怖いイメージを払しょくするような明るい感じにしました。」

今年「寝屋川アビゲイル」の後、続けて2作品を出版し、精神的に活動。そんな姿に「小学校5年生の長男は『パパは小説家』と友だちに言っているようです」と目を細めます。

来年は節目の10作目を出す予定。「ホラーは人の感情に訴えるジャンル。ちよっと泣けるミステリーなどヒューマンドラマも書いてみたい」と話しています。



「ねやがわいちばんがい」で

おなじみの場所や地名が登場する「ご当地作品」の「寝屋川アビゲイル 黒い貌(かお)のアイドル」(講談社タイガ)。怖いホラー小説だけに「地元の反応が気がかかりでしたが、皆さんに喜んでもらえているようでホッとしています」と胸をなでおろし、シリーズ化も考えています。

### 妻に頼み3年間執筆に専念

「3年間だけ小説をやらせほし

てくれ、電子書籍の作家を目指しました。

ところが何の成果もなく、あっという間に2年が経過。「あと1年やっても同じや」と目標を公募の文学賞に定め、「一発逆転じゃないけれど、作品が出せる賞は全て応募しよう」と決めました。

### 1か月で書き上げ受賞

この決断が功を奏しました。「いろんなジャンルの作品を書いてい